

第 21 章 震災後に福島へ。「よそ者」だからできること

福島県・ダイバーシティふくしま

前川直哉



実施日：2018年12月10日 聞き手：杉浦郁子・Natasha Fox

実施場所：福島大学（福島市）

【プロフィール】

1977年生まれ。兵庫県尼崎市出身。現在は、福島大学教員、「一般社団法人ふくしま学びのネットワーク」事務局長、「ダイバーシティふくしま」共同代表。1995年4月に大学進学。在学中の4年間と卒業後の4年間、東京で暮らす。2003年にUターンし、2004年10月から母校である私立灘中・高校（神戸市）の非常勤講師、2007年4月から同校正教諭（担当は日本史）。京都大学大学院人間・環境学研究科で男性同性愛の社会史を研究し、博士号取得。2014年に灘中・高を退職し、福島市に移住。

1. 福島への移住

◆福島との縁

2011年の夏に、当時勤めていた灘中・高（灘校）の同僚と2人で、岩手県釜石市にボランティアに行きました。東日本大震災から5か月経っていましたが、まだ建物の上に津波で流された車や船が載っているような状態で、衝撃を受けました。釜石では泥かきのボランティアをしたのですが、学校に戻って、生徒たちにその話をしたら、生徒たちも「自分たちも現地に行って、ぜひボランティアをしたい」と言ってくれました。

東日本大震災のときに灘校の生徒だったのは、ちょうど阪神・淡路大震災の前後に生まれた子どもたちなんです。たぶん、周囲から「あなたが生まれたとき、こういう大きな地震があった」と話を聞いて育ってきたんだらうと思うんです。だから自然と、東日本大震災についても「自分たちも何か、できることをしたい」という気持ちになっていたのかもしれない。

それから希望する生徒を引率して、宮城県と福島県の被災地へ定期的に通うようになりました。灘校は、こうした活動を積極的に支援しているわけではないですが、教員が「私が責任を取ります」といえば、やらせてくれる学校です。最初に生徒と福島を訪れたときは、震災から1年後でしたが、学校内でも特に何も言われませんでした。大きな被災を経験した学校ですから、他人事でない、というのもあったと思います。灘校は、1995年の震災で阪神高速道路が倒れた場所の、すぐそばなんです。避難所にもなりましたし、学校の周囲は、

木造も鉄筋も、たくさんの建物が倒壊していました。

生徒を引率しての東北訪問の1回目は2012年3月でした。その後も春休みや夏休み・冬休みに、3~4日間の訪問合宿をしています。旅費は自費で、けっこうかかりますから、初回の参加者は8人。その後も毎回20人ぐらいです。最初は定期的に行う予定はなかったのですが、生徒たちに「続けましょう」と言われ、通っているうちに福島との縁が深くなっていきました。いまも続いていて、今度で22回目、延べ300人以上の生徒が来ています。

今はもう、東北の被災地でも短期のボランティアを募集しているところはほとんどないので、ボランティアをするのではなく、福島や宮城の被災地を自分の目で見て、いろいろな方のお話を伺う活動が中心です。震災から時間が経って、関西には東北の現状があまり伝わってこなくなっていますから、やはり知ること、自分の足で訪れることは重要です。生徒たちは、福島の方から「知ることがボランティア（知るボラ）」という言葉聞いて、自分たちのしていることを「知るボラ」「伝えボラ」と位置づけています。

◆阪神・淡路大震災の経験

僕自身が1995年の阪神・淡路大震災で被災したのは、灘高3年生の時です。センター試験の2日後でした。センター試験が1月14日、15日とあって、16日に高校で自己採点をして、17日に地震が来た。17日から高校で国公立大学の二次試験対策の授業が始まる予定でしたが、灘校自体が大きく被災し、授業は一度もないまま卒業しました。

僕は当時、尼崎市のマンションに住んでいました。建物自体は壊れず、家族も無事でしたが、タンスの下敷きになりかけたとか、家具がめちゃくちゃになったとか、ライフラインが寸断したとか、そういったことは経験しています。避難所には行っていませんが、水道が復旧するのに時間がかかって、ほぼ毎日、マンションの5階まで水を運んだことを覚えています。電気は割と早く復活したと思います。食べ物は、大丈夫でした。両親が喫茶店をやっていたので、ストックがあったのだと思います。

両親の喫茶店は同じ尼崎市内の別の場所にありましたが、地震で半壊しました。自営業の店がつぶれると、家の収入が0になってしまうので、その点は不安でした。大学の入学金や授業料は免除してもらえたとしても、下宿代はどうしようもないですから。

尼崎から大阪へ出る電車が運転再開してからは、大阪に勉強しに行きました。大阪に行くと、お店も普段通り開いているし、いつもの日常という風景なんです。あれが不思議な感じで……。家にいてもなかなか勉強に集中できる状況ではなかったので、大阪駅近くで無料開放されていた予備校の自習室に通いました。大阪に出ると、トイレの心配をしなくていいのがとくに良かったです。家の水道がなかなか復旧しなかった。その頃に、外でトイレをする癖、行けるタイミングで行っておく習慣ができました。

神戸や阪神間の具体的な被害の状況は、あとから知りました。ラジオで情報を得ることができましたし、何日かすると新聞も配達されていました。テレビが映るようになった時には、報道が一段落していて、「もしこの地震が東京で起きたら」という目線になっていました。自分の周りでは、まだ家が崩れているのに嫌だな、と思いました。地元の『神戸新聞』は、本社の社屋が倒壊してしまったので、4ページとか、8ページとか、少ないページ数でした

が、「希望を持ち続けよう」という思いのこもった言葉を発信していた。そのことをすごく覚えているんです。東京目線の報道と、ローカルメディアの報道の両方を見て、高校生ながら、すっきりしない思いを抱えて過ごしていました。

◆「中心と周縁」への関心

自分自身の関心は、ずっと「中心と周縁」の関係にあったと思うんです。セクシュアリティの問題もそうですし、ジェンダーの問題でもそうなのですが。自分はゲイ男性で、性的マイノリティとして周縁化されつつ、男性で灘校の教員であるという点では中心にいる側だ、といった思いを抱きながら仕事や研究をしていた時期に、原発事故が起きました。

そこで初めて、自分はどこの原発で事故が起きて、安全な場所に住んでいる、ということに気が付いたんです。近畿2府4県に、原発は1つもないですから。でも関西電力の原発依存率は、当時、5割を超えていた。原発でつくられた電気をたくさん使っていたのに、その電気は、福島県から来ていた。地理的な意味でも、自分が「中心」側にいることを突き付けられた気がしました。

灘校で担当していた日本史は、「中心と周縁」が露骨に現れる科目なんですよ。どうしても、その時期の中心から周縁を見る描き方になる。だから、東北の子どもたちにとって、日本史の教科書ってあまり面白くないはずなんですね。自分たちの暮らす東北が、時代の切れ目のたび、常に「やっつけられる場所」として描かれているから。古代から中世の切れ目は、頼朝の奥州征伐ですよ。中世から近世の切れ目は秀吉の全国統一ですけど、あれも、最後は東北諸大名の服従で終わります。近世から近代の切れ目は戊辰戦争ですから、東北はいつも最後にやっつけられる役回りになっている。中央を主語にするからそういう描き方になるわけで、主語を東北にしたら、全然違うのに。東日本大震災と原発事故の後、そういう日本史という科目を、灘校で教えている自分に、もやもやする思いが出てきたんです。

そんな中、生徒と東北を訪れるうち、福島で親しくなった高校の先生方や、活動している人たちは、すごくかっこよかった。誰かのせいにするのではなく、まずは自分たち自身で、この状況を少しずつ良くしようとしていた。生徒を連れ何度も通ううち、こういうかっこいい大人たちと一緒に、福島で仕事をしたい、と思うようになっていきました。

それに、福島の原発事故は、灘校の卒業生をふくむ学歴エリートたちが起こしたようなものだ、という思いもありました。具体的に「誰が」というわけではないですが、首都圏に電気を供給する原発が福島の双葉郡に設置されたこと、そこで大事故を防げなかったことについて、日本の企業なり官庁なりの中枢にいる、学歴エリート層の責任はすごく大きい。だったら、その「ケツを拭く」仕事、福島に関わり続ける仕事をやりたいと思い、2014年春に、灘校を退職して福島市に移住しました。

このときは、中1から高3まで6年間担任をしていた学年を卒業させるタイミングだったんです。思い入れのある学年に、「こんな生き方もできるよ」「ぼん、とレールを外れるのもアリだよ」と伝えたかった、ということもありました。もちろん、お金の問題は大きいですが、でもある程度は貯金していたし、一人暮らしなので、アルバイトをしながら、かなり節約すれば、3~4年ぐらいいはもつかな、と思っていました。

2. ふくしま学びのネットワーク

◆団体の設立

福島に越してすぐに、非営利の団体「一般社団法人ふくしま学びのネットワーク」を立ち上げました。2014年4月に登記をしています。

この団体のミッションは、福島の中高生の主体的な学びをサポートすることです。自分のためとか、受験のためとかだけでなく、自分が学ぶことで誰かを幸せにできる、笑顔にできると思っている子どものサポートをする。福島には、震災の後、そういう利他的な思いを持つ子どもたちが多く感じます。それを強要する気は全くないのですが、「人のため」のほうが勉強のし甲斐がある、と思っている福島の子たちを支援したい。

幸いなことに、活動に賛同してくださる方が会員になってくださったり、灘校OBのお医者さんがたくさん寄付してくださったりしました。灘校生の東北訪問合宿でお世話になっていた福島の高校の先生方も、とても暖かく迎えてくださいました。「学びのネットワーク」の活動を生徒に宣伝してくれたり、いろいろな形で支えてもらっています。

移住したタイミングで、東大の特任研究員になりましたが、それも、福島の高校の先生が、福島で活動していた東大の先生につないでくれたおかげです。本当に多くの人が助けてくださって、何とか続けて来られました。

学びのネットワークは、僕は事務局長で、代表理事は僕の恩師です。灘校の教頭を務めたあと、立命館大学に移った人ですが、代表は関西在住なので、学びのネットワークの普通の仕事は、ほぼ僕1人でやっています。人を雇えるほどの予算はありません。しばらくは僕も無給でしたが、賛助会員が増えてからは、事務局長として少しだけ給料をもらっていました。2018年に福島大学の教員になり、大学から給料をもらえるようになったので、今は「学びのネットワーク」からはもらっていません。

この間、お金もだいぶ出て行って、貯金も目減りしていますけど、予想していたよりは順調です。大学に勤めてからは、生活も安定しました。

◆教育をターゲットにしたのは

学び、教育をターゲットにした理由は単純で、僕がそれしかできないからです。学部3年生で振り分けられるときに、教育学部を選んだんです。入学当初は、仏文に行きたかったんですよ。でも、入学してすぐにフランス語が難しいとわかって。英語もろくにできないのに、フランス語ができるわけがないと、そこではじめて気づきました（笑）。

大学1、2年生のとき、大学が自分の思っていた場所と違うように感じ、ぜんぜん行かなくなってしまう時期もありました。ステューデント・アパシー（無気力）でしょうね。阪神・淡路大震災との関連や、自分が性的マイノリティだったということは、あったのかな、どうなんだろう……。とにかく非常にネガティブで、落ち込んでいて、「自分なんか死んじゃえばいいんだ」という自殺念慮は確実にあった。

でも、アルバイトだけはとりあえず行っていました。大学入学後、お金がないから、すぐに塾講師のアルバイトを始めたんです。そしたらある日、生徒が「先生、今日はなんか、元

気なさそうだから、あげるよ」ってマシュマロをくれた。僕は塾では数学を教えていたんですけど、「先生の授業、わかりやすく好きだよ」と言ってもらえた。その子たちの名前も顔も、今でも覚えていますけど、そのとき「こんな自分でも待ってくれる人がいるなら、自分は生徒たちのために生きればいいんだな」と思いました。それ以来、自分の中で、教育というのは大きいです。

就職活動はせず、大学卒業と同時に、アルバイト先の塾にそのまま就職しました。仕事自体は、すごく楽しかったんです。正社員を4年で辞めたのは、ハードワーク過ぎたことと、もうひとつ、教育と商業主義はあまり相性がよくないと感じたからです。この生徒にもっと教えたいと思っても、月謝を払えなければ辞めていく。家計の余裕がなくて夏期講習を休む生徒に、「タダでいいからおいで」とは言えない。そのあたりに限界を感じて、学校教育に転じました。通信制の大学で教員免許を取ったのは塾を辞めた後、28歳の時です。

僕はこれまで教育しかやっていないので、教育関連しか分からない。逆に、教育はずっとやってきているから、少しは何かできるかもしれない。学校との折衝で困っている、うまくいかない、と悩んでいるNPOは多いと思うんですが、僕は中高の教員をしていたので、学校の先生はどういうときに忙しいか、とか、どういうものを求めているかが分かる。学校の先生が欲しがっていることを提供できるので、割とうまくいくんだと思います。

3. ダイバーシティふくしま

◆設立の経緯

2015年6月には、「ダイバーシティふくしま」を設立しました。「福島を多様性尊重の先進県とする」、そのために活動する市民団体です。法人登記はせず、任意団体です。

福島に来て1年経って、親しくなった人たちも増えて、何か活動をやりたいね、という話になったんです。その頃に、セクシュアリティも含めて多様性の問題に関心がある、という大学院生を紹介されました。その院生さんは修士1年で、時間的な余裕がありそうだったので、「しめた」と思って(笑)。自分1人ならしんどいと思っていたんですけど、動いてくれるスタッフがいるならできるな、と思ったんです。試しに「こういうの、やってみない？」と誘ったら、「面白そうですね」とその院生さんが乗ってくれて、「ダイバーシティふくしま」が始まりました。

ちょうどその年に、福島で市議選と県議選がありました。立候補者アンケートを一度やってみたいと思っていたので、性的マイノリティ、民族的マイノリティ、男女共同参画社会の推進という3つのテーマで、多様性に関する候補者アンケートを実施しました。結果は、ホームページにアップしてあります。

ダイバーシティふくしまは、性的マイノリティの 이슈に特化してはいません。共同代表には、当時、桜の聖母短大にいらした二瓶由美子さん、県立医大の藤野美都子さんがいて、お二人はジェンダー法学がご専門です。もう1人の川端浩平さんは、社会学で、在日コリアンに関する研究をしてきた方です。僕は、セクシュアリティとジェンダー。

共同代表の4人がどうして集まったかということ、福島は小さな街なので、何か活動して

いると、どこかで出会うんですよ。映画のイベントで会ったり、知人に誘われた食事会で紹介されたり。会いたいな、と思う人とは、だいたい会えていますし、すぐに仲良くなります。手ごろなサイズの地方都市ならではかもしれません。

◆「多様性尊重の先進県」に込めた意味

福島は県全体で、原発事故のあと、スティグマを負わされました。「風評被害」は、英語では「stigma」と訳されることもありますが、農作物の風評被害に限らず、住んでいる人も、地域も、原発事故のスティグマに苦しむこととなった。今もまだ、そういう状況にあると思います。結婚差別の話を耳にすることもあります。

加えて、住民同士が分断させられてしまいました。たとえば、一時避難をしたか、しなかったか。避難した、できた人もいれば、避難しなかった、できなかった人もいる。あるいは、「地元の食材が学校の給食に出る」というとき、子どもにそれを食べさせるかどうか。外遊びをさせるかどうか。ついこの間まで近所で、すごく仲の良かった人たちが、そういったことで対立させられる場面がたくさんあったし、今もある。本来、対立しなくていい人たちが、対立を余儀なくされている、という状況は、福島のいたるところで見られます。

そういったスティグマや分断の状況が、自分の問題と重なって、「違いを認め合う、あるいは違いを歓迎するような考え方や、そのための仕組みが必要なんじゃないか」と考えるようになりました。

◆ダイバーシティ・ナイト

ダイバーシティふくしまの活動のメインは、「ふくしまダイバーシティ・ナイト」です。誰かスピーカーが最初に話をして、後半は来場者が自由に意見を言い、お互いの話に耳を傾ける。自分と他者の、価値観や背景の違いを「歓迎する」ことを大切にしています。

第1回（2015年7月28日）のテーマは、性的マイノリティでした。それまで、福島でこのテーマを扱ったイベントは、あまりなかったのではないかなと思います。活字メディアなどで「LGBT」のテーマが多く取り上げられはじめたぐらいの時期でした。最近の第28回（2018年6月11日）は、「食と農の多様性」でした。ジェンダー系のテーマが多くなりがちですが、他にもいろいろなテーマでやっています。

実は、院生のスタッフさんが社会人になったこともあり、ダイバーシティ・ナイトのペースが落ちてしまっています。最初は月1回、去年から2か月に1回かな。それも、今はちょっと止まってしまっていて……。でも今度は、性差別についてきちんと考えるシンポジウムをやろうと計画しています¹。2018年は、ジェンダーや性的マイノリティに関して、いろいろな問題が立て続けに起きましたから。医大入試の女性差別事件、財務省のセクハラ事件と、杉田水脈氏のLGBT差別問題の3つを取り上げる形で、年度内にやりたいと思っています。福島はまだまだ男性社会なので、セクシュアリティの問題もやりつつ、ジェンダーに

¹ 2019年3月17日にシンポジウム「性差別のない社会へ」を開催。共同代表の二瓶由美子、藤野美都子、前川直哉がそれぞれ「財務省セクハラ問題と性暴力」、「医学部入試における女性差別」、「あいつぐLGBT差別発言」をテーマに講演。

ついて定期的に声を上げ続けることが大切だな、という思いがあります。

ダイバーシティふくしまは、任意団体なので、無理なく自分たちのできる範囲でやろうと思っています。一度だけ、小さな助成金を取ったことがあったのですが、色々と書類が面倒くさかった(笑)。イベントの入場費とカンパだけで、細々とやっています。身の丈に合ったことしか、やっていません。

4. 成果、意義、課題

◆よそ者だからできる

ダイバーシティ・ナイトという、話せる場があるのはやはりいいことだし、自分でやってみて、意外と簡単にできることもわかりました。ホームページも無料で作れるし、ネット印刷ならフライヤーも安く作れるし、SNSを上手く使って告知すれば、毎回20人くらいは来てくださるし。無理なく場を作る仕組みはできた、と思っています。

自分たちのコミュニティは、自分たちで良くするしかないんだ、ということを実感自身、体現できたのはすごく良かったです。「ダイバーシティ・ナイトを始めて、この町がどう変わったのか」と聞かれたら、「大して変わっていないけど、でも、ダイバーシティ・ナイトのようなイベントを気軽に開ける雰囲気は作れた」と言えると思います。

場をつくるハードルはあるんですけど、やっぱり大事なものは、人だと思うんですね。エフォート100でなくても、エフォートのいくつかをその活動に注げる人が1人いれば、場は回ると思う。ただ、その人が一生それをやるか、というと、たぶんしない。僕は、1年でも、2年でも、十分じゃないかな、と思っています。1、2年やって、疲れて閉めても、きっと誰か「あのイベント楽しかったな」と思った人が、また始めてくれるから。やらないよりは、やったほうが絶対いいし、途絶えたら、また始めればいいわけだし。最初から「ずっとやる」と考えると、しんどいでしょう。

学びのネットワークの活動は、大学やら県の教育委員会やらとの調整が必要になるので、早くから準備して、けっこう時間をかけてやりますが、ダイバーシティ・ナイトは、自分たちだけでやるので、調整はそんなに必要ないです。今はダイバーシティふくしまのイベントは、企画書やチラシの作成は大抵、1人でやっていますが、大勢でつくるよりは1人でつくるほうが楽ですよ。自分で原案をつくって、メールでメンバーの皆さんに見てもらって、意見を言ってもらって修正する。仕事だとか、活動だとかあまり考えず、楽しいからやっている感覚です。それに、チラシをつくったり、企画を考えたりするのが、好きなので。要するに趣味です。

もうひとつ、重要なこととしては、ダイバーシティふくしまの活動ができるのは、僕がよそ者だからかもしれません。自分の出身地で、なかなかこうしたイベントはしづらい。もっとハードルが高かったと思います。よそ者だからできた。これはおそらく、東北に限った話ではないと思います。僕が、自分の出身地である尼崎市で、小さい頃の友だちや、親の知り合いや親戚がいる中で、「私はゲイです」という話をしろと言われてたら、かなり厳しいです。福島に来て、自分の地元から切り離されているから、ダイバーシティだ、セクマイだ、とや

れている部分が、僕の場合はあります。

そういう「よそ者」の立場を自覚して、自分で利用している部分もありますね。自分のもっているコネクションも、活動のためならあまり出し惜しみすることなく、ガンガン使っていくし。基本は行き当たりばったりでやっているんですけども、「これが失敗しても、まだこれだけ貯金はある。そこまで困らない」といった計算は、頭のどこかでしている。負け戦をしない、というよりは、負けても致命傷にはならないよう、常に予防線を張っている部分はあります。基本的に小心者なので(笑)。だから、助成金も、なるべく取らないようにしているのかもしれないですね。助成金をとると、自転車操業になりそうなので。

◆福島の「プライド」活動

僕は、学びのネットワークの活動でも、福島の中高生に「君たちは福島の明日を担うんだから、福島に残れ」なんて言うつもりは、全然ありません。残っても、残らなくても、どちらでもいい。

福島県出身のいちばんの有名人って、たぶん、野口英世なんです。お札にもなってますし。でも、野口英世が福島にいたのは、10代までで、あとは東京に行ったり海外に行ったりして、福島にはほとんど戻って来てないわけですよ。でも福島の人にとっては、記念館を建てたり、賞をつくったりするくらいの誇りです。

だからみんな、野口英世みたいになってくれればいいわけです。県外だろうが、海外だろうがどこに行ってもいい。ただ、「出身はどこなの」と聞かれたときに、「福島です」と自信をもって答えてほしい。「福島は、結構いいところだよ」とか、「高校の時に、こういう授業を受けてたんだ」「多様性を尊重する福島で自分は育ったんだ」と胸を張って言ってくれる人が、東京や海外にたくさんいてくれたら、と願っています。

現実には、原発事故の後、県外に進学や就職をしても、「福島出身です」と言えない人がいるわけです。今はだいぶ減ってきましたけど、まだいる。「出身どこ？」と聞かれて、「東北です」とぼかしてしまったり、口ごもっちゃったり、一瞬間があいて「福島です」みたいに答えたり。やっぱり色眼鏡で見られるから。その子たちは、何の選択もしていないのに、スティグマだけ背負わされた。これは、大人が責任を取らなければいけないことです。

だから、僕の教育投資は、直接的には回収されないんですけど、全然問題ないです。福島で仕事をしたいと思うなら残ってもいいし、県外に出たいなら出たらいい。ただ、どこでも「自分は福島で育った」という誇りをもって、それをときどき周りに自慢してくれれば、僕は嬉しいです。そういう意味では、僕がやっているのも、福島の「プライド」活動の一種なのかもしれませんね。

◆活動のこれから

持続性には、実はあまりこだわりがなく、その場でやりたいと思ったことをやっていくのが先なんです。ただ、学びのネットワークに関しては、教育は継続することが大事なので、多少かたちは変わっても、なるべく続けたいと思っています。去年の高校1年生にはできたけど、今年の高校1年生にはできない、というのは良くないし、「一時の打ち上げ花火

だったね」と言われるのも、子どもたちに対して良くないですよ。

福島に越してきたときは、「前川というのが来たが、あいつは、いつ関西に帰るんだ」と思っていた人も多かっただろうし、今もいるかもしれません。でも僕は福島が好きで、ずっと住むつもりで越してきました。別に、福島が大変だから、かわいそうだから来たわけではなくて、食べ物もお酒もうまいし、自然も温泉もあるし、何より自分で道を切り開く、かっこいい大人たちがたくさんいる。骨を埋めるつもりで来ているので、あまり焦らず腰を据えて、やりたいことを広げていければ、と思っています。

郡山市で「ダイバーシティこおりやま」を主宰されている阿部のり子さん（本冊子にインタビュー掲載）は、ふくしまダイバーシティ・ナイトに参加した方なんです。「私もやりたい」とおっしゃって、「やってください」と言ったら始まったんです（笑）。エネルギーな方で、本当にたった1人で始めて、すごいペースで活動しておられて、私もとても刺激を受けています。「これ、やっていいですか」と断らなくても、やっていい。誰かに断りはしない。それぞれが個別にやりたいことをやる、やっていいんだ、と思ってもらえるきっかけになれるのは、嬉しいですよ。

5. 福島のこと、東北のこと

◆福島の中の違い

福島県の中にも、中心と周縁の構造があると感じます。

福島市など中通りにいると、今はもう震災なんてまるでなかったような日々を過ごす人も多いし、中には「もう震災の話はいいだろう」と言う人もいます。一方で、原発事故のせいで、今なお避難生活を余儀なくされている方も大勢いる。あるいは、避難指示が解除されても、人口がなかなか戻っていない地域もたくさんある。福島大学の学生でも、原発のある浜通り（太平洋側）には行ったことがないという学生が多い。だから、福島大学では「ふくしま未来学」というプログラムで、福島の地域課題を学ぶ機会を作っています。

県内の格差は、もちろん原発事故の前から存在していました。2002年に発覚した東電のトラブル隠し事件について調べたことがあるんですけど、トラブル隠し発覚後、県の要求で福島県内の原発全基が運転停止になると、地元の双葉郡が困惑する、という構図があった。双葉郡のいくつかの町は、原発モノカルチャーのようになってしまっていたから、原発が止まると地元経済が動かなくなってしまうわけです。そもそも、なぜ原発モノカルチャーになったかという、福島市や郡山市など中通りの地域が高度経済成長に乗れたのに対し、双葉郡はそれに乗り遅れていた状況があった。原発設置の段階から、県内に違いはあったんです。

◆女性の政治家が少ない

自分の出身地と福島とでは、1つには、政治分野における女性の割合が全然違うな、と思いました。阪神間は、女性の首長が多いところで、土井たか子さんの選挙区でもあった地域です。女性が政治を担うのは、当たり前前の光景でした。

それに比べると、福島は、特に政界は圧倒的に男性社会です。福島県には59の市町村が

あるんですけど、首長は全員男性です。女性の労働力率は高いんですよ。ワーキングマザーも多いです。だけど、管理職の女性割合や、地方議会における女性議員の割合は低い。これは大きな課題だと思っています。

◆性的マイノリティの可視化

福島は、たとえば青森と比べると、かなり東京に近い位置にあります。福島市だと、新幹線で東京まで1時間半ですから。そのこともあって、大学進学や就職のときに東京や仙台に出る人は、やはり多いです。性的マイノリティ当事者がいったん東京に出て、そこで自分らしさを獲得して、戻ってきているというケースもあります。逆に東京に行ったきり、福島には戻らない人も、もちろんたくさんいます。

福島県内での性的マイノリティの可視化は、まだ全然、進んでいないと思います。「私の周りには性的マイノリティはいない」と思っている人も、まだまだたくさんいます。「東京にはいるんでしょう」とか、「最近が増えてきましたよね」みたいなことを言う人も多いです。当事者の可視化は必要だと思っていますが、顔を出して活動できる人は限られているので、まずはネットを使ったアンケートなどで、県内の性的マイノリティ当事者の声の収集・発信をするのが良いのかな、と考えています。

去年の男女共同参画プランの改定の際に、僕も福島県の審議会のメンバーだったので、「性自認や性的指向にかかわらず等しく尊重され受容される社会の実現」という項目を入れたんです。県レベルの男女共同参画プランで、性的マイノリティに関して、1行ではなく、1つの項目として入ったのは、かなり早い方だと思います。東京都のプランにも盛り込まれたのですが、東京が「性的少数者への支援」というフレーズだったのに対し、福島は「SOGI」の考え方を盛り込んだので、福島のほうが一歩先だと僕は自負しています(笑)。

県内でも、男女共同参画センターや学校などで、性的マイノリティや多様な性をテーマにした講演が増えました。僕も講師として声が掛かったら、日程を調整して何うようにしています。学校に呼ばれ、学年全体に対して話す機会もあります。この間は、中学2年生が対象でした。少しずつ、こうした機会が増えると良いですね。